



カーテンウォールと「Room」がモザイクを織り成す象徴的なファサード。



新世紀のキャンパス

Campus of New Century

北海道薬科大学 臨床講義棟



北海道の石狩湾を見渡すパノラマビューの丘の上に立つ北海道薬科大学。



「Room」と「Space」を組み合わせた、開放的な吹き抜けのアトリウム空間。

北海道薬科大学は、2006年の6年制薬学教育スタートに合わせ、臨床講義棟(C棟)を竣工した。学生や環境との「共生」をコンセプトに、薬剤師育成に最適な学習環境の提供を目指す。

2010年度から、病院等の臨床現場において長期実務実習が義務化される。この実習を実りあるものとするために

は、学内での事前の実技実習が望ましく、臨床講義棟の建設は不可欠だった。「薬剤師という国家試験の合格も大切ですが、医療人としていかに能力ある薬剤師を育成できるかが本質的に重要。この2つのミッションを実現するために臨床講義棟はある」(渡辺泰裕 広報部長)

臨床実習の場として「薬局実習室」「製剤・TDM室」「注射薬配合室」等を設置。特に新設した「無菌室」は、今後増加する在宅医療に備え、薬局が担う輸液調剤機能も視野に。調剤実習を1年次より実施し、低学年で専門性の高い機器に実際に触れることでモチベーションを高め、学習へのフィードバックに生かすのが狙いだ。

また少人数制でより学習効果が高まると指摘し、グループ学習のできる演習室を多く設置。館内随所にある「アルコーブ(ミーティングスペース)」も、学生の自主学習をサポートする。

さらに全館LAN対応とし、入学時に学生全員にPCを購入させ、授業もPCをフル活用する。これはインターネットが薬剤師にとって不可欠なツールだからだ。重要な医薬情報が国内の紙ベースに落ちるには相当の時間を要するため、常にインターネットを通して英語の最新医薬情報を読解する能力が求められる。英語教育も重視しており、小規模の薬学系単科大学ながら英語の専任教員4人体制で、4年次の前期まで英語を必修科目とし、後期の医薬情報学の授業へとつなげていく。

環境面では、光熱費を浪費しない空調設備や断熱構造、最上階の蓄熱室、エントランスのある2Fの全床冷暖房、日射しを遮り視界を遮断しないアルミルーバー等を採用した。また限られた面積でも居心地の良い空間にしようと設計を工夫。建物を積み木を積んだ形状にたとえ、1つの積み木を押し出すと、出っ張り「Room」と引っ込み「Space」ができる点を利用。それを幾重にも重ね、変化と広がりのあるユニークな内部空間を実現し、「2008建築学会作品選奨」を受賞した。



日本海を一望できる学生テラス「マリンホール」。



全館に7箇所設置された「アルコーブ」。



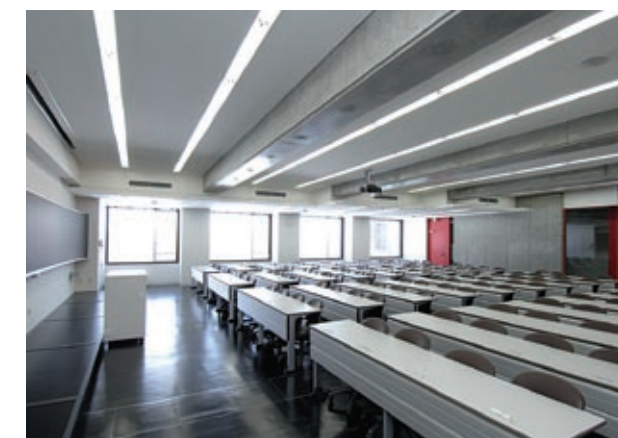
調剤室では、錠剤や散剤、軟膏剤などの調剤をトレーニング。



薬局実習室では、教員が患者、学生が薬剤師に扮し、処方箋窓口での接客を練習する。



薬剤師が活躍する現場をリアルに再現した「無菌室」のエアシャワー。



講義室では、PCと大型プロジェクターを用いて授業を展開。